

「革新(イノベーション)と挑戦(チャレンジ)」



常務執行役員
石川 卓

経済学者ヨーゼフ・シュンペーターは、イノベーションの特徴の一つとして、「イノベーションの成否は、市場によって決定される」としています。分かり易く言えば、「開発段階ではイノベーションは起きておらず、その技術が革新的か否かでもない、技術を使った新製品が爆発的に売れて初めて、イノベーションが産まれたことになる。」

自動車技術の中でのイノベーションとは、ここ20年位では、「環境性能」という新しい商品価値をつくった「ハイブリット技術」だと言われています。他方、スマートフォンやゲーム機に代表されるように、身近な家電製品やIT業界では数多の破壊的イノベーションが生まれ、その結果として多くの老舗企業が苦境に陥ってもあります。そして、今、自動車の世界でも、次のイノベーションが起きようとしています。その答えが、昨今あらゆる所で取り沙汰されている「自動運転」と「電動化」の中にあるのか、「クラウドコンピューティング」が前提となるのか、或いは、全く違うキーワードの中にあるのか、私たち開発陣に突き付けられた大きなテーマであると捉えています。同時に、これらキーワードでは、従来技術の延長線にある開発競争のみならず、競争相手も、更には戦う土俵さえも、これまで経験してきた世界とは異なってきています。私たちは今、様々な変革の波と向き合っています、弊社が取り組むべき方向性について、私たち一人ひとりが何をすべきか考えるきっかけにすべく、本誌のタイトルを「車社会の変革」としました。

車社会そのものが大きく変革を求められている中においては、既存の製品、既存のものづくりにとらわれず、材料、素材から、工場のIoT化、物流、マーケティングに至るまで、ビジネス全体を通したあらゆるイノベーションが求められています。

もう一つ、付け加えると先に紹介したシュンペーターは、「いくら馬車を列ねても、それによって決して新しい鉄道を得ることは出来ない」とも言っています。

このように変化のスピードや変化の大きさが著しい環境下ではありますが、忘れてはいけないのが、弊社はイノベーションの代表事例である「青色LED」の開発と実用化を世界に先駆けて世に送り出した企業であるということです。豊田合成のDNAとして脈々と受け継がれている「挑戦する心」を大事にし、「車社会の変革」に一丸となって立ち向かおうではありませんか。

本誌の特集では、2017年10月に開催された「第45回東京モーターショー」への出展技術としました。将来の自動車のあり方に向けた弊社からの提案です。興味を持って読んで頂ければと思います。

また、今回、特別寄稿として、今まさに時流に乗った電気自動車の開発に取り組まれ、開発スタートから僅か5年で「トミーカイラZZ」をEV車として復活させ、世に送り出したベンチャー企業GLM社の技術本部長、藤壇様に執筆をお願いしました。世界の各社が、取り組みを強化している「電動化」の先駆者でもあり、また、京都発にこめられた内面的なもの、そして何よりも挑戦し続けるマインド、私たちがあらためて見つめ直さなければならないことにも気付かせてくれる貴重なヒントが多々含まれていると感じています。

是非、楽しみつつご一読いただければ幸甚です。